フランス大使館へ行って

外国語学部
国際文化交流学科２年
萩原 愛実

日本人にとっては、芸術やファッションの国として人気のあるフランス。２０１２年には大統領選挙が行われ、注目となることの多い国だが、実際のフランスとはどのような国なのか。大使館広報部の伊藤幸子さんと研修員のアドリアン・アヴェルカさんにフランスや大使館について伺った。

今回はその中での発見を紹介していきたい。なお、ここでのフランスのお話はアドリアンさんの見解、我々と伊藤さんの考察によるところが多いことを了承願いたい。

アンドリアン・アヴェルカさんと
伊藤幸子さん

●フランスって？

ご存知の通り、ヨーロッパの一国であるフランスはいったいどんな国なのだろう。北側にドイツ、南側にはスペインがある。人口はおよそ6,500万人で、首都はパリだ。日本ではファッションや料理・芸術などの面で高い評価を得ており、芸術の国としてのイメージが強い。また、クールジャパンの表れの一環として『ジャパンエキスポ』が行われている国でもあり、フランス側も日本の文化に関心を持っているようだ。

フランス地図

●大使館での主な仕事は仲介

海外に旅行した際にお世話になるイメージから、大使館の仕事とは旅行などの際にする手続きの受付場所といった認識をしている人も少なくない気がする。だが、大使館の仕事というのは正確にはそういった手続きだけではないようだ。

大使館での主な仕事、大原則は、国と国とのやり取りの仲介をすることであるそうだ。フランス大使館を例にすると、在日フランス人の保護や補助、日本とフランスとの輸出入などの流通の仲介や管理、フランスの情報を日本に伝える際の発信源になること、主にこの3点が大使館における大事な仕事ということになる。

この原則からか、各大使館は各国との関わりは特に大事にしている様子がうかがえる。フランス大使館では内装や飾られている絵画などの作品をフランス人の無名・若手アーティストから買い取ることで、新たな才能を発信すると同時に、彼らの活動を支援しているのだ。芸術やファッションのイメージが大きいフランスだが、実際には技術開発の面でも優れている。日本と提携して開発を行う機会も少なくないとのこと。こうして国の特徴をフルに発信していくことが、大使館で一番重要な仕事のようだ。

フランスの若手アーティストが作った
コラージュ

●フランス人と政治

大統領選挙が行われ、政治面でも大きな話題を作ったフランスだが、フランス人はどのように政治と向き合っているのだろう。

日本で考えると珍しいように思えるが、フランス人にとって政治は国民全員の関心事で、日常の会話でもよく出る話題のようだ。ディスカッションが好きな国民が多いのではないかと思われる。党員として積極的に活動しようという人も少なくないとのこと。

デモにたいしても積極的である。教育関連であれば、該当者となる生徒が積極的にデモを行っている。アドリアンさんに、日本に来て印象に残ったことや驚いたことはありますか、と聞いたところ「電車やバスでお年寄りにすぐ席を譲る若者が少ないことだ。」と話していた。一般的な道徳として認識はしているものの、積極的に行動に移ることは少ない傾向にある日本人。デモを行っても控えめな様子だと思った、ともアドリアンさんは話していたので、フランスはとても積極的なお国柄であるように思える。

●教育面はどうだろう？

積極性について話している際、道徳の教育や学校のいじめなどの話が出てきた。特にフランスの男性へのイメージとして女性に紳士的であると感じてる方もいるかと思うが、そのような印象を作る教育環境はどのようなものなのだろうか。

まず、それが女性に対してのものかどうかは抜きにして、フランスでは最低限の道徳やマナーを家で教えるのが普通のようだ。というのも、学校にはサークル・クラブや部活などがなく、団体生活を体験する機会がかなり少なくなっている。学校ではとことん学習に時間を割くので、家での親の教育はかなり重要であると考えられる。

しかし、だからと言っていじめなど、団体生活ならではの問題が皆無という訳ではないようだ。

実際、フランスでも、日本の報道のようにクローズアップされることはないが、自殺などの深刻な

被害になるいじめの事例もあるとアドリアンさんは話している。

●フランスと日本文化

ジャパンエキスポの開催などをしているフランスだが、実際どれくらい日本文化のブームが来ているのだろうか。

お話を聞いた限りでは、日本の漫画やアニメといったサブカルチャーは、主にオタクな人達の間でのブームであり、国全体でブームが起きているわけではないとのこと。現地でニュースになったりすることはないが、興味のある人達にとっては大きなお祭りではあるようだ。ただ、だからといって日本の芸術などの評価が低いわけではなく、例えば日本の映画、黒沢監督作品や北野武作品などは人気だ。フランスは映画大国とも言われており、映画が安く見られる環境でもあるらしく、その中で人気が出ているということは、日本の作品もかなり高い評価であると言えそうだ。国全体として考えると、歴史的な和の文化の方が日本文化としてのイメージは深いようである。

●今回、インタビューを行ってみての参加者の感想

【萩原】今回、初めて大使館に行くことになり、貴重な体験ができたなと思いました。初めてづくめで失敗ばかりでしたが、実際にその国と関わりのある人でないと聞けない話などもあり、とても発見のあるインタビューになったのではと思いました。

【山崎】以前はチリの大使館インタビューに行きましたが、今回のフランス大使館は、敷地面積も広く、セキュリティも厳しい物でした。まずはその外観の違いから大使館も国によって様々なのだと感じました。移築した事もあり、とにかく（中も外も）綺麗だし、何よりお洒落でした。そこがまたフランスらしいとも感じました。

【吉田】政治への関心・マナー・教育・文化の相違を自分自身で直接お話を伺うことができ、とても勉強になりました。どの国も物事のあり方や人の考え方は時代と共に変動するものだと今回の取材で理解しました。海外で生きる日本文化があり、ジャンルを問わず日本に興味を持ってくれる人が多いのだと知りました。大使館は国と国だけでなく人と人も繋ぐ役割がある大きな存在なのだと改めて実感しました。

【長瀬】今までの大使館インタビューでは、その国の気候やお祭りなど、土地を紹介して頂いてきました。今回のインタビューでは、今までと違い、政治などの時事問題といった深い内容まで切り込むことが出来たと思っています。それに伴い、事前調査など、こちらの知識があってこその質問だったと感じたので、国について学ぶことの大切さを改めて実感しました。

アンドリアン・アヴェルカさんと筆者たち

オープンキャンパス２０１２報告

外国語学部
英語英文学科４年
梶山 紫

横浜キャンパススタッフ
外国語学部
スペイン語学科３年
澤永 遼

湘南ひらつかキャンパス
スタッフ
経営学部
国際経営学科３年
鈴木 寛太

外国語学部　英語英文学科
梶山 紫

『大学でなにやろーかなと思って入学して、何やってたんだろーと思って卒業した。で、何したらいいんだろ』このキャッチコピーにドキッとする。高校生の時、受験勉強の最中、どんな未来を思い描いていたのだろうか。バイト、サークル、飲み会、留年しない程度の勉強の繰り返しの日々の中、何か大事なものを見失ってしまった気がする。

私が自分と向き合うきっかけになったのは、2年生の頃のオープンキャンパススタッフ体験だった。「この大学でやりたいことがあるんです！」と瞳を輝かせる高校生たちとの出会いはかつての抱いていた夢を思い出させ、同時に「負けてらんねぇな」と心を駆り立てた。

他のオープンキャンパススタッフ達は、この経験をどう捉えているのか。気になった私2名のスタッフに協力して頂き、文章を寄せてもらった。2人にとってオープンキャンパスの経験がどのようなものになったのだろうか。読者の方にもオープンキャンパススタッフに興味を持ってもらえたら幸いだ。

オープンキャンパスをしてみて
～『みえた』モノ『かんがえた』コト～

横浜キャンパススタッフ
外国語学部　スペイン語学科
澤永 遼

大学の事、学生の事や、そして自分の事…。今まで『見えなかったもの』が『みえた』。『考えなかった事』を『かんがえた』。これが私のオープンキャンパスをしての感想だ。

1．Why do you play the staff?

スタッフの人数が足らなかったこと、T橋さんやT葉さんら入試センターの方にお世話になっていたこと、そのとき金欠だったこと…スタッフに応募した理由は色々とあったが、一番大きな理由は、高校生と触れ合ってみたいということだった。私の受験やこれまでの人生における後悔や反省などを彼らに伝えることによって、彼らにはそのようになってほしくない。そんな押し付けのような感情をどこかに持っていたのだ。

2．What's the staff?

オープンキャンパスのスタッフは実に様々な仕事をしている。各所での誘導、説明会や模擬授